

かつて吉本隆明は丸山真男のことを、「思想家というには、あまりにやせこけた、筋ばかりの」、「学者というには、あまりに生々しい問題意識をつらぬいている」「奇異な存在」と評した。戦後啓蒙の旗手としての華々しいイメージ（そのため毀誉褒貶もさまざま）に比して、丸山が専門とした政治思想史の領域での仕事は、その多くが未完・未整理であることもあって、あまり知られていないし、現在もなお評価が定まっていない。

あらゆる権威が腐蝕して「ポスト真実」の時代に突入り、

## 丸山真男の〈再発見〉へと誘う

「反知性主義」というレッテル貼り（罵倒）の応酬が行き交う言論状況に対して、『反知性主義』によって一石を投じた著者は、その先に何があるのか見定めようと、本書では「正統」の復権が可能かと問う。このことは、世界に蔓延し、日本の（戦後）民主主義にも危機をもたらしているポピュリズムは、民主主義の「異端」なのかという問いとも重なる。

「始まり以外にない」と言い切っている。

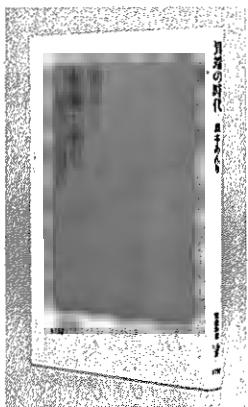
著者 もりもと・あんり  
略歴 国際基督教大学務  
副学長・教授（神学・宗教学）  
著書に『反知性主義』『アメリカ的  
理念の身体』など。

本書は神学や宗教学の側から丸山の「正統」論をとらえ返し、丸山政治学をアクチュアルな問題意識と広い射程を備えた「生々しい」ものとして提示すること

本書が丸山の「正統」論を参照するのは当然であろう。その上で、丸山の誤りをも指摘しながら、「正統」と「異端」をめぐる通念を覆していくところは実にスリリングである。さらに思想が「正統」の条件を充たさないからこそ「異端好み」の傾向が不断に再生産される日本には、「非正統はあるが異端はない」とし、「もし現代に正統の復権が可能だとすれば」、「正

知的なおしゃべり（タペリング）を好んだ丸山が最も楽しそうだったのが、本書でもとりあげられている『正統と異端』の著者・堀米庸三との会話の場だったという。

評 田村元彦



（岩波書店・929円）

真正銘の異端が現れることから

（西南学院大准教授）